



## 各部門審査委員長 講評および、審査委員一覧

### 【フィルム部門 審査委員 18名】 (敬称略、五十音順)

#### ■審査委員長

澤本 嘉光 電通/シニア・プライム・エグゼクティブ・プロフェッショナル、  
エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター

#### <審査委員長 講評>

フィルム部門は昨年に引き続きテレビドラマ、バラエティー、映画といった動画のプロや出演者の方と一緒に意見交換をして（メンバーについては資料をぜひ参考にさせていただきたい）広告の枠に閉じこもらない、映像の世界の中で広告フィルムを評価するという指針で審査している。なので結果は業界内の狭い意見ではなく広い意見として発表できていると確信している。

テレビで普段放送されているCM、というAカテゴリーでは、数年続いているシリーズCMに今年も良作が多いのが特色であり、裏返すと新陳代謝があまり進んでいないとも言えそうな結果だったが、その中でグランプリの「さけるグミ」は頭一つ抜けてそのばかばかしいほどに面白くすることに素直な作風がネットとテレビと両方を行き来できる内容として高い評価を獲得した。web動画を中心としたBカテゴリーは、昨年ほどの完成度の高い長編はあまり見受けられなかったものの、長尺を生かした企画、例えばNetflixの明石家さんまさんへのインタビューからなるドキュメンタリー風の作品など人間に寄ったものでの佳作が目についた。グランプリのサイボウズのアニメも、内容は働き方改革という時事ネタに対しての人々の見解という、かなり人の営みに寄ったものであった。いいね！を獲得しやすいようなエモーショナルな動画が多くなって来ているのが特徴でもあり、Bカテゴリーらしいバラエティーに富んだある種の乱暴さが失われて来ているのは少し残念であった。

この審査を通じて、広告、映画、テレビ、といった動画界が相互に交流を持って、さらに日本の動画をよくするという観点から貢献できると嬉しいところである。それがテレビ、webというメディアでの映像表現を進化させ、自分たちの業種自体も伸長させる原動力になると思う。

#### ■審査委員

尾形 真理子 博報堂フェロー/クリエイティブディレクター、コピーライター

奥山 雄太 SIX/クリエイティブディレクター、CMプランナー

川村 元気 東宝/映画プロデューサー、小説家

劇団ひとり 太田プロダクション/芸人

佐久間 宣行 テレビ東京/プロデューサー

佐々木 宏 シンガタ/クリエイティブ・ディレクター

佐藤 カズー TBWA\HAKUHODO/CCO、Creative Director

佐藤 健 アミューズ/俳優

佐藤 雄介 電通/CMプランナー、コピーライター

篠原 誠 篠原誠事務所/クリエイティブ・ディレクター

多田 琢 TUGBOAT/クリエイティブディレクター、CMプランナー

田中 里沙 宣伝会議/取締役メディア情報統括

那須田 淳 TBSホールディングス/プロデューサー、グループ経営企画局担当局長

福部 明浩 catch/クリエイティブディレクター、コピーライター

藤井 亮 電通関西/映像の企画・演出など

別所 哲也 パシフィックボイス 俳優/「ショートショート フィルムフェスティバル & アジア」代表

細田 守 スタジオ地図/映画監督

**【ラジオ CM 部門 審査委員 12名】** (敬称略、五十音順)**■審査委員長**

嶋 浩一郎 博報堂ケトル／代表取締役社長

**<審査委員長 講評>**

ラジオは生活に寄り添うメディア。聴覚だけでメッセージを受信するために、仕事をしながら、家事をしながら聞くことができる。スマートフォンアプリ「radiko」や、スマートスピーカーの登場によってさらに身近なメディアとしての進化がさらに期待されている。ラジオはそんな日々の生活のなかに潤いや小さな発見をもたらしてくれる。そして、ラジオは出演者が本音で語ることができるメディアでもある。しゃべり手と聞き手が対面になる感覚は他のメディアにはない感覚だ。

音声コンテンツによる情報発信が再び注目を集める今、これらラジオというメディアの特性を活かしながら、ラジオ CM は多様な方向に進化していることを審査をして実感した。

意外な発見をさせてくれるドキュメンタリー手法。本音を語るラジオの特性を活かしたストーリー構築。音というミニマムな素材で人の想像力を刺激する技術。作り手の多様なテクニックとその進化を感じることができた審査会だった。

グランプリ受賞作の群馬マスコミ 3 社による特殊詐欺ゼロキャンペーンは、実際に犯人が電話をしてきた時の音声を活用。現金の準備を依頼するその口調は意外にも深刻なものではなく、カジュアルなもので驚いた。リアルとはこういうことなのだろう。ドキュメンタリーCM の新しい挑戦が評価され、多くの審査委員の支持を得て同作品は今年のグランプリ作品に選ばれた。

**■審査委員**

- 秋吉 健太 ヤフー／Yahoo!ライフマガジン 編集長
- 小宮山 雄飛 GENIUS AT WORK 代表取締役／ホフディラン／  
渋谷区観光大使・クリエイティブアンバサダー
- 澤本 嘉光 電通／シニア・プライム・エグゼクティブ・プロフェッショナル、  
エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター
- 東畑 幸多 電通／グループクリエイティブ・ディレクター、CM プランナー
- 西田 善太 マガジンハウス／BRUTUS 編集長
- 橋本 吉史 TBS ラジオ／プロデューサー
- 秀島 史香 FM BIRD／ラジオ DJ、ナレーター
- 福本 ゆみ 福本ゆみ事務所／コピーライター、クリエイティブディレクター、俳人
- 細田 高広 TBWA\HAKUHODO／シニアクリエイティブディレクター
- 三井 明子 アサツー ディ・ケイ／コピーライター、クリエイティブディレクター
- 吉田 尚記 ニッポン放送／ビジネス開発センター ネクストビジネス戦略部 副部長

**【マーケティング・エフェクティブネス部門 審査委員 13名】**

(敬称略、五十音順)

**■審査委員長**

小和田 みどり ライオン/コミュニケーションデザイン部 部長

**<審査委員長 講評>**

グランプリ、本当におめでとうございます。

日本にこのような問題を抱える都市がたくさんある中で、多くの都市に勇気を与えることのできるキャンペーンだと思います。全員一致で、グランプリに決まりました。

まず「絶メシリスト」を作成する際に、地方の有名店というのではなく、地元の皆さんが薦める店舗を選んだということで、市民の巻き込みがとてもうまいと感じました。リザルトもPR効果や掲載店の売上増というだけでなく、後継者問題という深刻な課題についても解決の糸口ができ、書籍化、TV番組化と効果がとどまることなくどんどん広がり、町に活気と市民の誇りがでてきたというのはすばらしいと思います。そういった点においても、この活動の一步を踏み出した功績は非常に大きいと思います。

すでに、高崎を超えて九州でも同じような取組が展開されるとのことですが、この活動が日本全国いろいろな所で巻き起こって日本全体が元気になれば、ものすごいエフェクティブになるでしょう。期待しています。

**■審査委員**

- 朝生 謙二 ハチミツ (元アサツー ディ・ケイ) / クリエイティブディレクター、CMプランナー
- 上野 隆信 大塚製薬/ニュートラシューティカルズ事業部 宣伝部 課長
- 内山 健司 マンダム/執行役員 商品企画部・コミュニケーションデザイン部・  
第一マーケティング部・海外マーケティング室担当
- 奥野 圭亮 電通/クリエティブ・ディレクター
- 佐々木 亜悠 電通/コミュニケーション・プランナー
- 白井 明子 ローソン/マーケティング本部 シニアマネジャー
- 鈴木 あき子 サントリーコミュニケーションズ/宣伝部長
- 高田 伸敏 東急エージェンシー/  
クリエイティブ局局长 エグゼクティブクリエイティブディレクター
- 二木 久乃 博報堂/ストラテジックプランニング 部長
- 藤原 かおり カルビー/執行役員 フルグラ事業本部 本部長
- 松井 美樹 博報堂/統合プランニング局 局長 Executive Creative Director
- 山口 有希子 パナソニック コネクティッドソリューションズ社/  
常務、エンタープライズマーケティング本部 本部長

## 【ブランデッド・コミュニケーション部門 審査委員 16名】

(敬称略、五十音順)

## ■審査委員長

菅野 薫 電通 CDC/Dentsu Lab Tokyo

エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター、クリエイティブ・テクノロジスト

## &lt;審査委員長 講評&gt;

審査委員長を拝命したのを期に、昨年までのインタラクティブ部門を再構築しました。新しい部門名は、「ブランデッド・コミュニケーション」部門。クライアントと真摯に向き合い、主体となるブランドの持つ課題に対して、社会に対して、最も素晴らしいと思われるアイデアを一生懸命捻り出し、全力で実施する。ブランドに貢献する全てのアイデアを評価対象としました。我々広告業界の日々の仕事の中には、ちゃんと褒められるべきなのに、褒める場所がないアイデアがまだまだある。賞は議論しながら時代に合わせて変わり続けるべきです。今回の部門改定も最初の一步。まだまだ不十分だと思いますが、昨年の2.5倍の応募数となったことが何より励みになりました。審査委員のみなさま、大量の審査を本当にありがとうございました。

贈賞の順位に絶対の正解はありません。それぞれの人に、それぞれの価値観での順位がある。今回の審査結果も審査委員の総意で決められましたが、各審査委員の個人の評価順はそれぞれ違うと思います。それでも賞がある意味は、良い仕事とは何か、いまの時代において何が新しいアイデアなのか、審査委員が目一杯議論を尽くすこと。その結果に対して、みんなが賛否様々な意見を持ち、目の前の仕事に全力を尽くすこと。そういった議論を呼び、思考や感情を誘発することが賞の重要な役割だと思っています。今回の受賞結果で、今まで褒められることのなかったアイデアが発見されて、ここから新しい才能が発見されることを願っています。

## ■審査委員

- イム ジョンホ mount/代表取締役、Art director  
上西 祐理 電通/アートディレクター、グラフィックデザイナー  
大八木 翼 SIX/クリエイティブディレクター/共同執行責任者  
尾上 永晃 電通/プランナー  
小杉 幸一 博報堂/クリエイティブディレクター、アートディレクター  
佐々木 康晴 電通/第4CR プランニング局長、デジタル・クリエイティブ・センター長、  
エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター  
嶋 浩一郎 博報堂ケトル/代表取締役社長  
東畑 幸多 電通/グループクリエイティブ・ディレクター、CMプランナー  
中村 勇吾 tha/代表取締役、デザイナー  
橋田 和明 博報堂ケトル/クリエイティブディレクター  
MIKIKO イレブンプレイ/代表取締役、演出振付家  
八木 義博 電通/CDC クリエーティブディレクター、アートディレクター  
保持 壮太郎 電通/CDC、Dentsu Lab Tokyo/コピーライター、プランナー  
吉田 ユニ アートディレクター  
レイ・イナモト Inamoto & Co/Founding Partner

## 【メディアクリエイティブ部門 審査委員 11名】

(敬称略、五十音順)

## ■審査委員長

小山 薫堂 放送作家／脚本家／京都造形芸術大学副学長

## &lt;審査委員長 講評&gt;

メディアクリエイティブ部門で初めてのグランプリに選ばれた「PLAY THE GIFT」は、アーティストのパワーとファン特性の絶妙な掛け算を SNS 上で展開させたことによって、OOH のアセットを最大化させました。この成功は、SNS という装置が生まれたことによって、改めて人がメディアになりうるということを証明していると思います。

全ての企画は人との化学反応で価値を生み出します。それ故に「誰が何をするか」という点が非常に重要で、この企画があらゆるアーティストに通用するわけではありません。Hi-STANDARD というバンドだからこそできた企画で、ファンの特性も理解しながら、その唯一無二のやり方を発見したということが評価に値します。

まだ一度も聴かせたことのない楽曲を譜面だけでコピーさせるというのは不安ですし、大きな賭けだったはずですが、勇気を持って挑戦し、実際にそれをやったところ見事にファンに響いて拡散していった。

「ファンを信じている」というアーティストの愛情も垣間見え、本当に挑戦心と勇気に満ち溢れた、シンプルではあるけれども新しい時代の広告なんだな、と痛感させられた素晴らしい企画でした。

ゴールドには、テレビを活用した 2 作品が選ばれましたが、既成概念を取り払うと、アイデア次第でやはり強大な価値を発揮し得るのだと、テレビメディアのアセットを改めて見直すきっかけとなりました。

2020 年に向け、リアルタイムのマスメディアはますます重要になってくると思いますが、そうした意味で、テレビの可能性を再認識した今年の審査会でした。

## ■審査委員

- 大澤 あつみ トヨタ自動車／国内企画部 メディアチーム 主任  
佐藤 宏 広島テレビ放送／報道制作局長  
嶋田 三四郎 博報堂 D Y メディアパートナーズ／エグゼクティブマネージャー、プロデューサー  
立本 洋之 フジテレビジョン／編成局第二制作室長  
谷口 洋一 テレビ朝日／営業局 タイムマーケティング部 部長  
村本 美知 アサツー ディ・ケイ／エクスペリエンス・デザインセンター  
リ・マーケティング本部長 兼 EX デザイン局長  
森川 亮 C Channel／代表取締役  
森田 太 エフエム東京／執行役員 編成制作局長 兼 グランド・ロック 代表取締役  
湯川 昌明 電通／2020 プロデュースセンター局長  
和田 龍夫 サントリービール／執行役員 マーケティング本部長

**【クリエイティブイノベーション部門 審査委員 13名】**

(敬称略、五十音順)

**■審査委員長**

暦本 純一 東京大学 教授/ソニーコンピュータサイエンス研究所 副所長

**<審査委員長 講評>**

まずは、受賞者の皆さま本当におめでとうございます。

「ビッグ・アイデア×テクノロジー」を趣旨としている本部門ですが、ご覧になっていただくと分かるように、テクノロジーあり、アイデアあり、エンタテインメントもありという幅広い作品が揃いました。

そんな中で、グランプリを受賞した「スキンエレクトロニクス」は、まさにオンリーワン、世界でもここにしかないという技術でした。ただそれだけではなく、「あれに使えるかな」、「こうしてはどうか？」など、話がどんどん広がってアイデアが湧いてきます。大事なものは自己満足のテクノロジーではなく、それらの相乗効果や、使い方や応用の輪が広がっていくイメージができること。一つひとつの作品も素晴らしいけれど、そういうふうに広がっていくというのが“イノベーション”だと思うので、そのきっかけとなり、種を撒いていただけたところもすばらしかったです。

**■審査委員**

- 安宅 和人 ヤフー/CSO (チーフストラテジーオフィサー)  
池澤 あやか 東宝芸能/タレント、クリエイター  
稲田 雅彦 カブク/代表取締役 CEO  
井上 裕太 \QUANTUM CSO、QUANTUM\GLOBAL CEO  
佐々木 康晴 電通/第4CR プランニング局長、デジタル・クリエーティブ・センター長、  
エグゼクティブ・クリエーティブ・ディレクター  
鈴木 雅穂 トヨタ自動車/コネクティッドカンパニー ITS・コネクティッド統括部 総括・企画室 室長  
野添 剛士 SIX/クリエイティブディレクター、代表取締役  
深田 昌則 パナソニック アプライアンス社/Game Changer Catapult 代表  
朴 正義 バスキュール/代表取締役、クリエイティブディレクター  
森岡 東洋志 ワントゥーテンドライブ/CTO、テクニカルディレクター  
矢澤 麻里子 Plug and Play Japan/Chief Operating Officer  
米澤 香子 電通/Dentsu Lab Tokyo Creative Technologist

以上